writing with fire

BLACK TICKET FILMS PRESENTS A FILM BY RINTU THOMAS & SUSHMIT GHOSH CINEMATOGRAPHY BY SUSHMIT GHOSH & KARAN THAPLIYAL EDITED BY SUSHMIT GHOSH & RINTU THOMAS SUPERVISING EDITOR ANNE FABINI ORIGINAL SCORE BY TAJDAR JUNAID
TITLE THEME AND CREDIT TRACK BY ISHAAN CHHABRA SOUND DESIGN BY SUSMIT 'BOB' NATH SOUND MIXING BY JANNE LAINE COLORIST SIDHARTH MEER ASSOCIATE PRODUCERS BHUMIKA TIKHATRI & SUMIT SHARMA CO-PRODUCERS JOHN WEBSTER & TONE GRØTTJORD-GLENNE
CO-EXECUTIVE PRODUCER ANURIMA BHARGAVA EXECUTIVE PRODUCERS PATTY QUILLIN & HALLEE ADELMAN PRODUCED BY SUSHMIT GHOSH & RINTU THOMAS WRITTEN AND DIRECTED BY RINTU THOMAS & SUSHMIT GHOSH

2021 山形国際ドキュメンタリー映画祭 市民賞

第94回 アカデミー賞® 長編ドキュメンタリー賞 ノミネート

2021 サンダンス映画祭 ワールドシネマ・ドキュメンタリー部門 審査員特別賞&観客賞

2021 アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭 観客賞

2021 サンフランシスコ国際映画祭 最優秀長編ドキュメンタリー賞

2021 ポーランド・クラクフ映画祭 シルバーホーン(社会派作品賞)

2021 モロディスト・キエフ国際映画祭 最優秀ドキュメンタリー賞

2022 ベルギー・ミレニアム映画祭 観客賞

2022 アメリカ・ピーボディ賞 ドキュメンタリー部門

世界が絶賛！各国で30以上の映画賞を受賞！

燃えあがる女性記者たち

世界は変わる、変えられる。

インド北部で、
被差別カースト・ダリトの女性たちが
立ち上げた新聞社「カバル・ラハリヤ（ニュースの波）」。
偏見や暴力にひるむことなく、
独自のニュースを伝え続ける
彼女たちのドキュメンタリー。

監督 リントゥ・トーマス／スシュミト・ゴーシュ

2021年｜インド｜ヒンディー語｜DCP｜93分｜原題：Writing With Fire

配給：きろくびと © BLACK TICKET FILMS, ALL RIGHTS RESERVED.

●東京都推奨映画 ●文部科学省特別選定（青年/成人向き）・選定（少年向き）

writingwithfire.jp

心を奮い立たせる

ニューヨーク・タイムズ紙

魅力的で希望に満ちたドキュメンタリー

スクリーン・インターナショナル

最も感動的なジャーナリズム映画

ワシントン・ポスト紙

《ウッタル・プラデーシュ州》
インド北部にある国内で4番目に大きな州。人口は国内の州で最も多く約2億人に達している。

「カバル・ラハリヤ（ニュースの波）」小さなメディアが巻きおこすビッグウェーブ、世界で賞賛の声！

インド北部のウッタル・プラデーシュ州にあるダリト（ダリット）※注の女性たちだけで立ち上げた新聞社「カバル・ラハリヤ」（"ニュースの波"という意味）は、紙媒体からSNSとYouTubeの発信を主とするデジタルメディアとして、新しい挑戦を始める。ペンをスマートフォンに持ちかえた彼女たちは、貧困とカースト、そしてジェンダーという多重の差別や偏見、さらには命の危険すらある暴力的な状況のなか、粘り強く小さな声を取材し続けていく。やがて、彼女たちの発信するニュースは、インド各地へと大きな広がりを見せるのだった――。

監督のリントゥ・トーマスとスシュミト・ゴーシュが完成までに5年の歳月を費やした長編ドキュメンタリー第1作となる本作は、2021年サンダンス映画祭ワールドシネマ・ドキュメンタリー部門の観客賞と審査員特別賞受賞を皮切りに、2021年山形国際ドキュメンタリー映画祭市民賞、第94回アカデミー賞®長編ドキュメンタリー賞ノミネートなど、世界各地の映画祭で30を超える映画賞を受賞、高い評価を得ている。

注：ダリト（ダリット）の本来の意味は"抑圧された（者）"。カースト制度の外側・最下層に置かれて「不可触民」として蔑まれ、人が嫌がる汚れた仕事を押し付けられてきた。現在は、法律でカーストに基づく差別を禁じ、不可触民制の廃絶と違反者への罰則も規定されているが、彼／彼女らに対する差別は根強く残っている。

メディアで人を守ることができる――心の声を聴くことをあきらめない

「カバル・ラハリヤ」は、大手メディアが注目しない農村の開発や地方自治の問題を報道している。知識も経験も豊富な主任記者のミーラは、ニュースのデジタル化に戸惑う仲間を励ましながらも、自身の子育てと夫の無理解に悩んでいる。有望記者のスニータは、やる気も能力も十分だが、家族と世間からの結婚の圧力に疲弊し、新人のシャームカリは、自分の取材能力に自信が持てなくなっていた。それぞれの悩みを抱えながらも徐々に記者としての取材方法を獲得していったミーラたちは、次々と反社会勢力の存在や警察の怠慢などを明らかにしていく。そして、むかえた地方選挙。「カバル・ラハリヤ」の記者たちは、その最前線の取材へと飛び込んでいく。

燃えあがる女性記者たち

監督・撮影・製作：リントゥ・トーマス＆スシュミト・ゴーシュ　撮影：スシュミト・ゴーシュ、カラン・タブリヤール　音楽：タジダール・ジュネイド
共同プロデューサー：ジョン・ウェブスター、トーネ・グロットヨルド＝グレンネ　共同エグゼクティブプロデューサー：アヌリマ・バルガヴァ
エグゼクティブ・プロデューサー：パティ・クイリン、ヘイリー・エイドルマン　日本語字幕：福永詩乃　宣伝美術：中野香　宣伝：contrail　配給：きろくびと
2021年｜インド｜ヒンディー語｜DCP｜93分｜原題：Writing With Fire　© BLACK TICKET FILMS. ALL RIGHTS RESERVED.

●東京都推奨映画　●文部科学省特別選定（青年/成人向き）・選定（少年向き）　writingwithfire.jp

第16回WILPF映画会

9.19（木）14:00（開場13:30）

会場　セシオン杉並ホール（杉並区梅里1-22-32）

料金　1,200円（全席自由）

主催 問合せ　婦人国際平和自由連盟（WILPF）日本支部
03-3944-6730（火・木10:00～16:00）
wilpf-j@galaxy.ocn.ne.jp